Thai History & Art Style

タイの歴史

最近の考古学調査で、今から約4,000年〜7,500年前に世界最古の青銅器文明がタイ北東部のバン・チェン村一帯で繁栄していたことが判明されています。

その後モン、クメール、タイを始めとする様々な部族が中国南部から肥沃な峡谷地帯を経て、現在「タイ」の名で知られるこの地域に次々と押し寄せ、11世紀〜12世紀までの間には、クメール族がアンコールを遷都し、国土の大部分の覇権を制しています。

13世紀初頭にはタイ族がスコータイに最初の独立タイ王国スコータイ王朝を築き、以来、アユタヤ王朝、トンブリー王朝、そして現在のチャクリ王朝と4つの王朝がタイ王国を動かしてきました。

① スコータイ王朝（1238〜1438A.D.）

13世紀初頭、タイ族は揚子江南部から中国に圧迫されてインドシナ半島中央部に南下し、ラナ、パヤオ、スコータイの各地域に小都市国家を建設。タイの地域を支配していたクメール帝国に、1238年、タイ族の首長2人が反旗を翻しスコータイを攻略。ここにタイ民族の歴史上最初の国家スコータイ王朝を築くことになります。スコータイは、サンスクリット、パーリ語で「幸福の曙」を意味します。

第3代のラム・カムヘン国王は、優れた統率力で国土を現在のタイとほぼ同じ大きさに広げ、先住民族のクメール人から統治制度を学び、豊かで自由な国家をつくりました。文化面でも小乗仏教がタイの国教として確立し、クメール文字を改良したタイ文字も創案。絵画、彫刻、建築、文学など初期のタイ芸術様式が誕生し、タイの伝統文化の基礎を築いています。スワンカローク焼はこの頃の中国との交流で学び生み出されています。

14世紀中頃、ラム・カムヘン国王の死とともにスコータイ王朝は衰退。しかし、現在もラム・カムヘン国王は国の創始者、民族国家の象徴として国民から尊敬されています。

Sukothai:Wat Mahathat
スコータイ/ワット・マハタート
スコータイ城壁都市のほぼ中央に位置する最も重要な王室寺院。

② アユタヤ王朝（1350〜1767A.D.）

1350年にラーマティボディ1世により築かれたアユタヤ王朝は次第に勢力を広げ、ラム・カムヘン国王の死とともに衰退した前王朝のスコータイをも属国としました。また、初の法典をつくることで国内の基盤を固め、アジアでも屈指の大国となります。

ボロムラーチャー2世はクメール帝国を攻略し、続くボロムトライロカナート王がクメール人から学んだ知識をもとに中央集権体制を確立。その一方でマレー半島までに国土を広げ、王朝は繁栄を極めました。この繁栄はポルトガルなど外国との交流を深めたラマチボディ2世から第14代プラチャイ王の時代まで続くことになります。

Ayutthaya:Wat Phra Sri Sanphet
アユタヤ/ワット・プラ・スリー・サンペット
1491年に第一級の王室守護寺院として建てられ、かつては高さ16m重さ171kgもの黄金の仏像が安置されていたというが、これもビルマ軍に破壊され、現在3基の仏塔しか残っていない。

Ayutthaya:Bang Pa-in
アユタヤ/バン・パイン
アユタヤ王朝第26代のプラサート・トーン王によって1632年に建てられた離宮。王朝の滅亡とともに一時廃虚となるが、チャクリ王朝のラマ4世と5世によって再興される。

16世紀後半に入ると、ビルマからの度重なる侵攻にあい、一時的にビルマの支配下に置かれました。しかし、ナレスワン王がアユタヤを奪回。その後もビルマの侵攻を数度にわたりくい止めています。

同じ16世紀後半から17世紀にかけて、各国から商人がアユタヤを訪れ交易が盛んとなり、タイはその優れた文化を開花させました。日本からも山田長政らが渡り、アユタヤに日本人町ができるほど日本人にとっても魅力的な交易地だったに違いありません。しかし、ビルマの侵攻に抗しきれず、33代、417年間に及ぶこのアユタヤ王朝時代は18世紀に幕を閉じることになりました。

③トンブリー王朝(1767~1782A.D.)

アユタヤの崩壊はタイ族にとってとても大きな痛手となり、混迷するタイ各地には多数の勢力が乱立。それを再びまとめたのがアユタヤ王朝では一武将だったピア・タークシン王です。中国人とタイ人の血を引くタークシンは、ビルマからアユタヤを奪還し、チャオプラヤ川をはさんでバンコクの対岸にあるトンブリーに王朝を築きました。歴代の王が成しえなかった、チェンマイまでも手中に収めた実力者です。

王朝を築き、優れた功績をあげたタークシンでしたが、晩年には精神に支障をきたし、部下に処刑されるという最期をむかえ、トンブリー王朝はタークシン1代のわずか15年という短いものとなりました。

Bangkok:Grand Palace
バンコク/王宮
1782年にラマ1世がチャクリ王朝を興すとともに建設が始まる。白い壁に囲まれた20万m²の敷地内には、歴代の王が造った数々の宮殿があり、ワット・プラ・ケオもこの敷地内にある。

④チャクリ王朝(1782A.D.~)

1782年、タクーシンの死後、彼に仕えていたチャクリがトンブリーの対岸バンコク(野生スモモの村の意)にチャクリ王朝を築きます。この王朝は現在でも継続している王朝であり、歴代の王はラマの称号で呼ばれ、現国王は第9代プーミドン国王です。

19世紀には第4代、5代王により近代化が進められ中央集権を強化。チャクリ王朝でもビルマやカンボジアとの睨み合いは続き、ヨーロッパ諸国の植民地化攻策の波も押し寄せていました。しかし、近隣のアジアの国が植民地化されるなかでタイは独立を貫いています。

この厳しい状況を乗り切り、欧米各国との不平等条約の撤回、郵便電信事業の開始、鉄道の敷設、軍政改革、教育制度の整備、奴隷制の廃止など数々の功績を残した第5代王チュラロンコーン王は、現在でもタイ国民の英雄的存在となり尊敬されています。

Bangkok:Chakri Mahaprasad Hall
バンコク/チャクリ宮殿
タイと西洋の様式が組み合わされた独特なデザインで、1876年から1882年にかけて建造。

⑤絶対王政から立憲君主制へ

20世紀に入り、世界恐慌とともにタイ国内の経済状況も悪化。国民の間で長く続いた王族専制政治への不信がつのり、1932年6月24日、人民党が無血クーデターにより政権を掌握。絶対王政は終わりを告げ、立憲君主政へと移行しました。

同年12月10日には憲法が発布。民主主義を唱え、立憲君主政となった後も、タイの政権は軍部によって動かされていました。4つの国に囲まれ、以前から侵略の脅威にさらされてきた歴史的背景から、政治にも軍部の力が強く反映されていたのです。

立憲君主制が施行されて以来、文民政権は誕生してもすぐに軍事クーデターによって潰されてきました。しかし、世界全体が平和な状態になっていくにつれ、「国を守るため」という軍部の建前は通用しなくなり、真の民主主義を求める国民の声は再び高まりを増しました。

6 民主化への道

1992年3月の総選挙では、民意を反映して反軍部政党が勝利を収めることになります。しかし、多くの議席を失った軍部は、民選議員ではなくスチンダ国軍司令官を首相に指名し、強行に軍政を維持しようとしました。これにチャムロン議員率いる国民のデモ集団が反発。軍隊がデモ隊に発砲する自体に陥りました。

この事態で多数の死傷者を出し、国内は一時的に騒乱状態と化したが、国王の鶴の一声で落ち着きを取り戻し、次選挙では文民政権が樹立。いま、タイは国民からの支持率も高いバンハーン首相のもと、真の民主化への道を模索しています。

またタイは西と北にミャンマー、北東にラオス、東にカンボジア、南にマレーシアとその国境を接していますが、アジアの多くの国が経験した、植民地としての歴史をもちません。その結果、王家に対する国民の敬愛の念は変わることなく、立憲君主制に移行した現在も続いています。

天使の都「バンコク」

「クルンテープ・マハーナコーン・アーモンラタナコーシン・マヒンタラーユタヤー・マハディーロックポップ・ノッパラッタナ・ラーチャターニー・ブリーロム・ウドムラーチャニウェート・マハーサターン・アモーンピーマン・アワターンサティト・サッカタットテイヤ・ウィサヌカム・プラシット」。

さて、この呪文のような言葉はいったい何でしょう。日本では「天人の都、雄大なる都城、帝釈天の不壊の宝玉、帝釈天の戦争なき平和な、偉大にして最高の土地、九種の宝玉の如き心楽しき都、数々の大王宮に富み、神が権化して住みたもう、帝釈天が建築神ヴィシュヌカルマをして造り終えられし都。」と訳されています。

実は「バンコク」という都市名は外国人による呼称であり、地元タイ人はクルンテープ(天使の都)と呼びます。その正式名称で、世界一長い都市名として知られています。もちろん、タイ人でもなかなか覚えきれないそうです。

Bangkok:Wat Phra Kaeo
バンコク/ワット・プラ・ケオ
1785年に建造。本堂に1778年にラマ1世がラオスのヴィエンチャンに遠征した際に持ち帰った、エメラルド色の翡翠でできた仏像が安置されていることから別名をエメラルド寺院ともいう。

Bangkok:Wat Arun
バンコク/ワット・アルン
数ある寺院の中で傑出した存在となっている高さ74mの大仏塔。創建はアユタヤ時代だが、チャクリ王朝時代になって大改修が行なわれ、表面に中国製の陶器がびっしり埋め込まれている。

Ban Chiang
バンチェン遺跡の彩文土器
紀元前3,600年～紀元200年のバンチェンには、その間に大きな3つの時代の遺跡が重なっており、この彩文土器は3世紀頃のものとされている。

タイの美術様式

新石器時代のバンカオ遺跡、バンチェン遺跡の彩文土器のいわゆる先史時代にも興味深い独創的な形と彩色模様をみることができますが、インドの影響が表われる時期はおよそ3～6世紀で、マラヤ半島およびチャオプラヤ川南西流域が中心でした。これより後の時代においてようやく初期の美術諸派が明確な形としてあらわれてきます。

タイ地域の美術史は大きく2の時代に区分され、紀元後数世紀のインドの影響を受けた初期から13世紀後半のインドシナ中央部地方にタイ人の王国が誕生するまでを先タイ期、そのあとタイ人王国の誕生から今日までを純タイ期と称しています。

13世紀後半から登場してくるタイ民族の諸美術様式は、本質的に上座部仏教を基盤としています。その後様々の美術様式との攪拌混淆の時代と生々発展の時代を経て、いわゆる独自のタイ美術が生み出されていくことになります。

① 先タイ期の美術様式

■ドヴァーラヴァティ美術様式（7～11世紀）

7世紀末に存在したトヴァーラヴァティ王国の名(堕羅鉢底「大唐西域記」)を冠する美術様式で、仏教を基盤とし、かなり広い地域に広がっています。

この美術はモン人の興隆期に展開され、彫刻に特徴があり、現存する建物の「ストゥーパ=チェディ」では基壇や階段の一部が残っているに過ぎません。これらの建物は一般に煉瓦造りで、赤土系焼煉瓦を漆喰いで、積み重ねていく手法がとられ、スタッコ装飾あるいはナコン・パトム、ウートーン、クー・ブワなどの地方でごくまれにテラコッタ装飾が施されていることがあります。

彫像は仏像(石材、青銅、スタッコ、テラコッタ)に限定され、インド的もしくはヨーロッパ的ともいえる座仏像があり、他に立像もあります。説法する像容が多く見られ、またこれに法輪が加えられている場合もあり、インド仏教の最も古い図像伝統を継承しています。現在までのところ、同じ頃各地に展開した仏教美術の中でこの美術様式を採り入れたのはトヴァーラヴァティ美術様式以外には確認されていません。

Dvaravati
ドヴァーラヴァティ美術様式
ドヴァーラヴァティ王国の首都ナコン・パトムは、タイ王国に初めて仏教が伝えられたとしても知られている。このプラ・パトム・チェディの原形もその頃建立。11～12世紀にクメールによって破壊されたが、釉薬タイルの色鮮やかな大仏塔として19世紀にラマ4世が再建した。

■シュリヴィジャヤ美術様式（8～13世紀）

スマトラ島一帯を支配したシュリーヴィジャヤ王国が、8世紀にマラヤ半島に領域を拡げていった時代に創出した美術様式です。

この様式は大乗仏教とヒンドゥー教の影響を受け、当時のインドネシア美術の影響が色濃く反映していることからほかの様式と区別されています。その痕跡を留めるチャイヤー地方などの建造物は残念ながら損壊が進んでおり、あるいは過剰な修復がなされたりしています。これらの建造物はチャンパ美術様式とも通じて

Srivijaya
シュリヴィジャヤ美術様式
スラタニのワット・プラ・ボロマサートは、ラマ5世によって再建されている。

います。

彫像類(石造製、青銅製)は造像技術の点からみてもまた図像学上からみても見事で、すでに確立されていたドヴァーラヴァティ美術にも影響を与えています。しかし10世紀以降になると、シュリーヴィジャヤ美術様式と共に大乗仏教やヒンドゥー教の信仰も影を潜めてしまいます。マライ半島部のナコーン・シー・タマラート地方に、この美術様式が僅かに名残を留めています。

■ロッブーリ美術様式(7～14世紀)

この名称は最初11～13世紀のロッブーリ地方と東部タイに見られるクメール様式美術を指していましたが、本来はダンレック山脈の北部地域、特にムン川流域におけるクメール様式の伝統美術あるいはクメール系に属する美術作品全体の呼称です。

しかし、12世紀末から13世紀初めにかけてクメール美術の一様式であるバイヨン様式が導入され、それに加えて地域的な手法へつくりかえています。シー・テープには8～9世紀頃から工房があったといわれ、いうなればロッブーリ美術の伝統的な構成と手法は独自の美術様式といえます。7～9世紀の建築装飾(まぐさ)および彫像(特に8～9世紀の青銅像)などから、この美術様式が初期から重要な位置を占めていたことがわかります。

13世紀半ば以後アンコール王朝の威光とその活動が退潮すると、ロッブーリ地方はさらに独自性を深め、12世紀から継承してきた伝統を発展させていきました。やがてタイ美術を象徴する塔堂形式のプーラン(ロップーリ)様式を創り出し、多彩な彫刻作品が生み出されます。この彫像芸術はアユタヤ様式美術の開花隆盛とあいまって活況を呈し、15世紀頃まで続きます。

Lop Buri
ロッブーリ美術様式
ピーマイおよびその周辺で出土されている、クメール遺跡の建造物を飾るラテライト(赤土)。

2 純タイ期の美術様式

■スコータイ美術様式(13世紀末～15世紀)

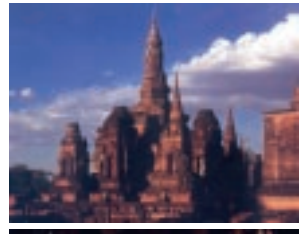
スコータイ朝はクメール族の政治支配を排除して13世紀中頃に樹立され、短命ながらも建設的な王朝で、建築、彫刻、陶芸などあらゆる美術分野を包括した多彩な民族芸術を生み出し、インドシナ半島の広い地域に長期にわたって大きな影響を及ぼします。

スコータイの彫工たちは多様な民族文化の蓄積を活用し、優れた美術感覚を駆使しながらその崇高な求法精神を具現した理想仏(特に遊行仏)をつくり出しました。これらの仏像がスコータイ美術の名声をゆるぎないものにしたと同様に、ヒンドゥー教の諸彫像においても優れた独創性が発揮されています。

さらに、スコータイ美術様式は寺院建築分野でも大きな貢献と影響を見せ、陶芸においても、中国陶工から学んだことで決して見劣りするものではないといわれています。

■ラーンナー美術様式(13世紀頃～20世紀)

13世紀末1292年にランプーン地方に在った国を倒して建立されたラーンナー王国、古いモン人の国家ハリプンジャヤ(タイ北部地



Sukhothai
スコータイ美術様式
モン族やクメールなどの文化を取り入れながら、蓮華のつぼみ状の頂華や火炎状の突起物、頭冠の螺髪など、独自の芸術的境地を発展させている。ワット・マハタートの中央塔堂(写真上)や1357年に創建されたピサヌロークのワット・プラ・シ・ラタナ・マハタートにある黄金の仏像にこの様式が見られる(写真下)。

Lanna
ラーンナー美術様式
都市国家連合ラーンナー・タイ王国の時代に建造された木造寺院の優美な装飾。チェンマイ（写真上）やチェンライ（写真下）。

方）では、ひとつの美術様式が興起し、その独自の美術が20世紀初めまで続きました。ラーンナー美術様式は、一般にチェンセーン美術様式（1327年に造営された都城）またはチェンマイ美術様式（1296年に建設された王国の都城）とも称されています。

この美術様式はその初期にビルマ在住のモン人が持ち込んだパーラ朝（812世紀、インドのビハール・ベンガル地方）の密教（金剛乗）的美術要素を積極的に取り入れたものと考えられています。

建築の分野では実に多様で他からのさまざまな影響を受け、政治的な変遷の結果としてビルマから強い影響を受けています。

■アユタヤ美術様式（14～18世紀）

1350年に創設されたアユタヤ朝は、広大な統一国家を創り上げ、それまでの多種多様な美術諸流派を包括し融合されていきました。チャオプラヤ川流域におけるクメール族の政治覇権に終止符が打たれてからすでに1世紀が過ぎ、この新しい王国の初期の美術はそれぞれの地域に存続してきた諸美術伝統を集積したものです。時には先タイ期のドヴァーラヴァティ美術様式やロッブーリ美術様式の衰退期の美術の延長線上に位置づけられています。

ロッブーリ美術はハリプンジャヤの都ランプーンの影響を受けていました。こうした諸美術様式の展開の中から、13～15世紀にウートーン美術様式が創り出されています。ウートーン様式で世に知られるのは彫刻（仏像）だけですが、その発展の過程をみると、当時、徐々にその勢力を伸張させていたスコータイ美術様式の影響がうかがえます。

スコータイ美術様式は15世紀以降アユタヤ美術の主潮となります。建築も同じくいくつかの流れが存在し、そのひとつはロッブーリ美術から受け継いだ祠堂形式の「プラーン」方式を採り入れて発展させています。

他にも「ストゥーパ」（仏塔）様式を展開させ、あるいはもとからの僧院本堂（ウィハーン=毘訶羅、ウボーソッ=布薩堂）をそのまま

Ayutthaya
アユタヤ美術様式
スコータイ美術様式の影響を受けた鐘形の仏塔、ワット・プラ・スリー・サンペット。

寺院を飾る「神話」の像

タイの伝説や神話に登場する、英雄や悪魔、巨人、半人半獣などが、寺院を飾る重要な要素になっています。

なかでもタイ王国の印として政府発行の書類等にも使われている、胴体は人間で鳥の頭と足、羽の生えた腕をもつ「ガルーダ」は、鳥の王でありヴィシュヌス神の乗り物とされています。このガルーダの異母兄弟で蛇の王である「ナガ」は、水の象徴であり、しばしば複数の頭をもって表現されています。ロッブリー時代の彫像によく見られます。

他には、神々がかき混ぜたミルクの海から現れた美しい天女「アプサラ」、女性の頭部と胴体に鳥の羽と足を持つ「キンナリ」、牙のような長い歯をもつ巨人「ヤクシャ」、ラーマキエン物語のなかでラマ王妃シータを助けるために援軍導く戦士として登場する猿神「ハヌマーン」などがあります。

残してさらに種々の建築物を取り込んでいます。これらの建造物のほとんどが1767年のビルマ軍によるアユタヤ都城攻略の際に破壊され、今日まで保存されているのはピサノローク、ベッブリー、ナコンシータマラートなどの地方の大寺院建築です。

■バンコク美術様式（18世紀末～20世紀初め）

バンコク美術様式（別称ラタナコーシン美術様式）はアユタヤ美術様式の直系にあたり、18～19世紀初めの旧都トーンブリや1782年以降の首都バンコクにある大寺院群は、500年以上にわたるタイ国における諸美術様式の変遷の総展覧ともいうべき華麗なさまを披露しています。

バンコク様式の彫刻は、当初、前代のアユタヤ美術を継承する形をとっていたものが、19世紀第2四半期（1824～1851年のラーマ3世治下）になると、宝冠仏など像容の新しい傾向と中国美術への傾倒がみられ、像容形式の刷新期となったといえます。

19世紀半ばを過ぎると（1851～1868年のラーマ4世モンクット王の治下および1868～1910年のラーマ5世チュラローンコーン王の治世）合理主義傾向が次第に強まり、これまでの伝統美術に西欧的な様式も導入されています。

大叙情詩「ラーマキエン」

古代インドの大叙情詩「ラーマーヤナ」のタイ版が「ラーマキエン」です。南タイに伝わる影絵芝居の語りに始まったのが起源とされ、アユタヤ王朝のタークシン王が加筆し、ラマ1世が集大成しています。

主人公はヴィシュヌス神の化身であるラーマ王。現王朝の歴代王がラマであり、スコータイやアユタヤなど過去の王朝の王にもラーマを冠した名が多く見られることからも、ラーマ王はタイ王朝にとって理想の王の姿とされてきました。

この「ラーマキエン」を題材とした壁画が、ワット・プラ・ケオの回廊を飾っています。

Bangkok
バンコク美術様式
黄金に輝くモザイクタイル。そして赤と緑の瓦のコントラストが特徴的なワット・プラ・ケオ内にある様々な装飾。ハヌマーンやキンナリなど、神話の像も至る所に点在する。